地域経済の景気予報／ひと目でわかる地元の景況・活況データーベース

北・陸 富山県

段ボールに新たな可能性を見出しアイデア溢れる商品を生み出す

ジャパンパック㈱

50代半ばでの創業にはいろいろと苦労があったと思いますが、長田社長はそれらをすべてクリアし、業績も順調です。現在、企業は環境問題には敏感になっています。新たに参入できる余地は大きく、そうした需要に応えるためにも、さらに生産体制を拡充していってほしいと思います。

高機能ダンボールで会社経営に乗り出した長田社長

地元の元気企業に聞きました 現在の状況とこれからの展望 福井県

地域経済の現状 福井県は市場が小さいため、県内企業は大都市や東京に市場を求めている状況です。最近は、県内の企業がネットを使った通信販売などに進出したり、観光の紹介をする事業がさかんになりました。福井県企業は「外貨獲得」の精神で他県に市場を広げようとしています。

地域経済の展望 これから福井県は、東京と大都市の間の距離感を縮めるため、もっとネットの活用が必要でしょう。そうすれば、福井県の土地柄をもっと他県に理解できると思います。サービスの付加価値をさらに付けやすくなるでしょう。ネットは県をアピールする手段のひとつとして定着できているといえます。地域間の賃金格差などの緩和も期待できると思います。

(株)インフォネット 岸田昇社長

会計人の眼

主婦や高齢者などが工場軽作業の「労働力」に

人材の確保という点では他を圧倒している。というのが富山の謳い文句。富山には「いくつになっても働いていたい」という高齢者や主婦などの働き手が多いからだ。「汗を流すことは美徳だ」という富山の県民性も影響しているのであろう。

女性、高齢者向けの代表的な仕事といえば工場内での軽作業。大手薬品メーカーの「下請」会社での薬の梱包や仕様書入れ、アルミサッシ工場でのサッシ梱包や工場内の荷物の整理などがそれだ。簡単な作業のように思えるがとても重要な仕事だ。たとえば、ジェネリック薬品工場では、使用書を入れ忘れたことがわかったら、製品をすべて開封して点検し、最初からやり直すという規律がある。仕事に意欲的な人材はどこでも貴重なのだ。

定年を迎えたサラリーマンも「嘱託」として勤務する人が多い。いつまでも働きつづける人が多いのは、経済的理由からではなく「社会とつながっていたい」という気持ちが優先しているからではないかと思う。

中川 敏裕 みずき監査法人(富山県高岡市)

お問い合せはコチラから

送り返してくる顧客がいる。送料や処理費用も負担しなければならないので頭を痛めている」と聞き、長田社長は段ボールの内側に防水フィルムを張る方法を思いつく。

だが、工場の充填ラインで使える製品をつくるのは容易ではなかった。改良を重ねて商品化にこぎ着けたのは1年半後。現在では、接着剤メーカーのほか、塗料や食品、自動車メーカーなどで使われている。

商品開発について長田社長は「お客様の困りごとを解決するという軽いスタンスで取り組んだほうがうまくいく」と考えている。

これまでは容器という枠内での仕事が中心だったが、今後はほかのジャンルにもチャレンジしていきたいという。今年2月には東京営業所を開設し、首都圏での営業も本格化した。アッと驚くような段ボール製品を目にするのも間近だ。

同社のオリジナル商品

福井県 観光情報 福井県へ越前おろしそばを食べに行こう!!

石川県 イベント 七尾市一本杉通りで「花嫁のれん展」

富山県 イベント 屋座みゆき通りフラワーカーペット2008開催

社長のひとこと

社長の自社採点

企画能力	★★★★★	人材力	★★★☆☆
営業力	★★★☆☆	専門性	★★★★★
成長力	★★★★☆	リサーチ力	★★★☆☆
収益力	★★★★☆	計画性	★★★☆☆
地域貢献力	★★★★☆	リスクマネジメント	★★★★☆

会社概要 本社／〒836-0806 富山県南砺市北野188／☎0763-76-1750／設立99年／資本金1000万円／従業員12名／http://www.japan-pack.com/

43

コロンブス　２００８年４月号（東方通信社）　４３Ｐ

段ボールに新たな可能性を見出しアイデア溢れる商品を生み出す
ジャパンパック㈱

５４歳、専務の地位を投げうっての創業。長田宏泰社長は高校卒業後、設立間もない包装資材製造会社に入社し、段ボール事業に従事してきた。長い間、付加価値の高い製品づくりを目指してきたが、会社の方針が量産重視に方針転換。そこでみずから起業することに。

もともと量産指向が強い段ボール業界。長田社長はそれを逆手にとって、手間をかかるものに活路を見出した。

開発したのは金属缶に代わる輸送容器「N パック」。発泡スチロールに代わる断熱容器「N クール」。切り花輸送容器「N フラワー」。みな段ボール製だ。製品第一号の「N パック」は、ある接着剤メーカーの声から生まれた。「容器は処理しにくいから、と送り返してくる顧客がいる。送料や処理費用も負担しなければならないので頭を痛めている」と聞き、長田社長は段ボールの内側に防水フィルムを張る方法を思いつく。

だが、工場の充填ラインで使える製品をつくるのは容易ではなかった。改良を重ねて商品化にこぎ着けたのは１年半後。現在では、接着剤メーカーのほか、塗料や食品、自動車メーカーなどで使われている。

商品開発について長田社長は「お客様の困りごとを解決するという軽いスタンスで取り組んだほうがうまくいく」と考えている。

これまでは容器という枠内での仕事が中心だったが、今後はほかのジャンルにもチャレンジしていきたいという。今年２月には東京営業所を開設し、首都圏での営業も本格化した。アッと驚くような段ボール製品を目にするのも間近だ。